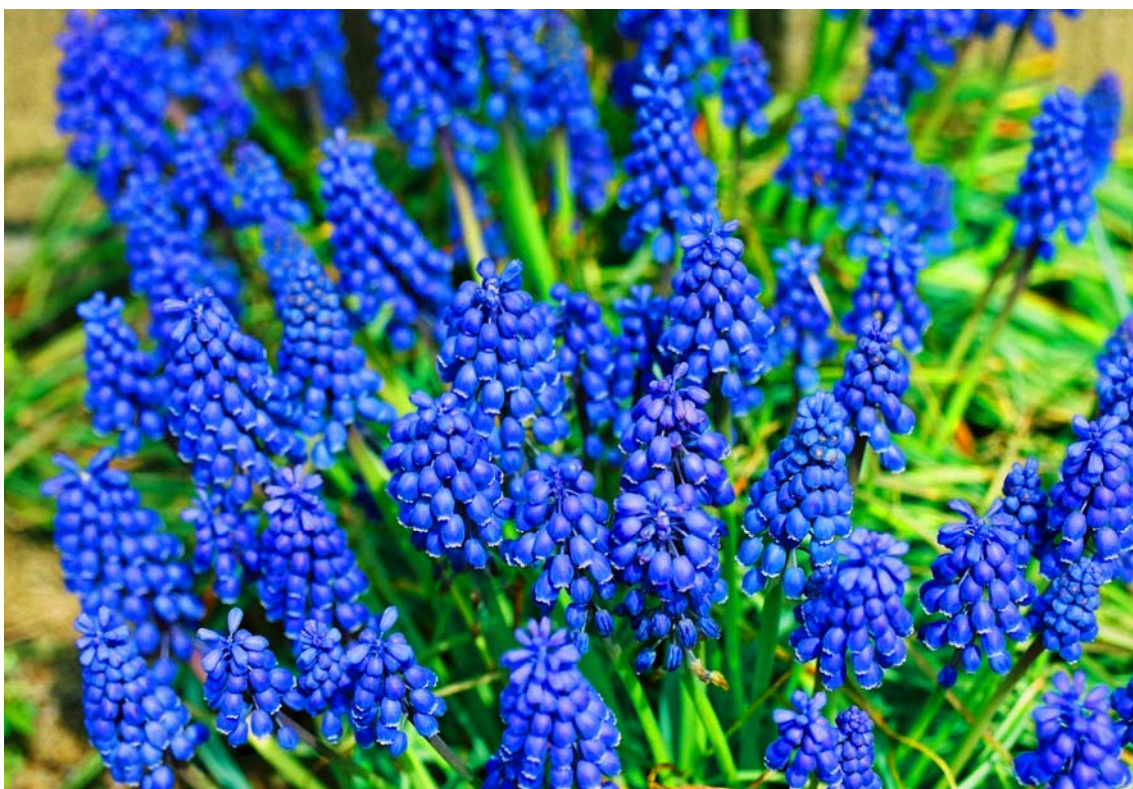


9) ムスカリ

ムスカリはユリ科ムスカリ属の多年草で、地中海から西南アジアを原産とし40~50種が分布する。ムスカリの語源はギリシャ語のモスコスに由来し、モスコスは麝香(ジャコウ)を意味している。この仲間には『*Muscari moschatum*』という麝香のような匂いを放つ品種があるためである。早春、スズランに似た形の花を総状につけ、一番近い仲間はヒヤシンスで、花色は濃いブルー、青、白などである。とにかく丈夫なのと草丈15~20cmと小さな丈で咲くところがいい。また濃いブルーの花色が他にあまりない色なので、花壇の彩りとしても最近急速に人気が出てきている。花がブドウのように見えるところから、日本では葡萄ムスカリとか、花の色が瑠璃色であるところから瑠璃ムスカリともいわれている。この花を近くでよく見ると、花の一つ一つが小さなボトルのような格好をしている。このためヨーロッパではボトリオイデスと呼ばれており、なるほどとうなずける。ムスカリの仲間ではこの他にも、小花が細かい羽毛で覆われたようになる品種もあって、これは羽根ムスカリと呼ばれており、こちらの方はピンクと紫の混ざったような藤色をしている。どれも丈夫でよく殖えるために、花の絨毯を作ったりするのにちょうどよい。赤や黄色の多い花壇の中で、この色はことのほかよく映えるばかりか、他の花をも引き立ててくれる。

ところでオランダのリッセ市はチューリップやヒヤシンスの産地として、世界的に名高いところで、かのキューケンホフ公園のあるところとしてもよく知られている。この公園はかつてはヤコバ・ファン・バイエルン伯爵婦人の別荘であった。伯爵婦人は狩りに来たときに、ここを根拠地として、このあたりで採取したハーブを料理用のスパイスとして、台所に持ちかえったと伝えられている。そもそもキューケンホフという言葉は、『*keuken*』(台所)と『*hof*』(庭園)との造語なのである。その後何度か専門家によって整備され、1914年第一次世界大戦が始まった年に、公園として一般開放されるようになった。2,500本以上もある古木のあいだに程よい間隔で花壇が設定され、世界でも最も美しい公園の一つになっている。しかし開園しているのはヒヤシンスやチューリップが咲く3月末から5月末までのほんの2カ月間だけである。木々の緑と庭内をゆっくり流れる水がいかにもオランダ的で、色とりどりの花が実に見事である。公園の中にはチューリップやヒヤシンスの間を縫うように、ムスカリの花の帯がえんえんと流れて、まさに「ムスカリリバー」というにふさわしいせせらぎになっている。この花はそんな園芸家の夢を十二分に満たしてくれるばかりか、庭師のデザイン志向にピッタリの花なのである。

丈夫な花なので栽培は簡単である。陽当たりと施肥だけに気を配れば、誰にでも立派な花を咲かせることができる。よく殖える球根草なのでこまめに分球することをお勧めしたい。植え土は酸性土壌よりも弱アルカリ性の土壌が良い。数年に一度の割に石灰などを鋤き込んでおくようにするとよいだろう。



ムスカリの花、春先こんな色の花を咲かせる植物はヒヤシンス以外にあまりない。このため庭にブルーを用いたいとき、真っ先に利用される(茨城県結城市財団法人日本花の会結城農場)。



ムスカリ(結城市財団法人日本花の会結城農場)



軽井沢のムスカリ。たまに施肥と石灰を入れてあげればこの地でもよく殖える。



ムスカリは花壇もいいが、大樹の根元に植えるとまた趣が変わってくる。

[目次に戻る](#)